

「建設業＋農業」で雇用拡大



新分野進出

株式会社柴田組
柴田 五郎

戦後の高度成長期の日本経済は飛ぶ鳥を落とす勢いで上昇し、素晴らしい発展を遂げてきた。特に建設業界は日本列島改造論に後押しされ、やることなすことがヒットする恵まれた環境にあった。そのような状況は近年のバブル崩壊に至るまで続き、建設機械二、三台を保有する企業も立派な建設業者として肩を並べあっていたのである。

ところが、ここ数年間の公共事業の減少とともに、今や民間工事までもが減少してきている。建設業として生き延びる事すら不可能な時代が目の前に迫っているようで、寂しさを感じる。会社環境はもちろん、生きる術までもが失われるのではないか。次の世代に何かを残してやる必要があるのではないか。戦後、世の中のすべてを経験した私として、そんな気がしてならないのである。

当社は社訓に「奉仕の心、和の心、啓発の心、福祉の心」と四つの精神を掲げている。しかし、果たして社員一人ひとりがこの精神のもとに生活していけるかどうか。いや、そ

のような精神を受け入れることができる社会環境なのかどうか、自分自身に問いかげざるを得ない日々が続く。また、当社では朝礼で私をはじめ従業員全員で「社会資本の充実と生活環境の整備を通じて地域社会に貢献する。社会の信頼にこたえ、融和と感謝の心を持ち職務に専念する。知識と技術を広く求め情操を養い自己啓発に努める。高い価値を創造し健康でより良い生活の建設と幸福をめざす」と朗読し誓い合い、その精神で働いている。だが、今の建設業を取り巻く環境はこのような精神を発揮できる状況にはない。

このような状況の中で、「有限会社 高源農産」「農業生産法人 今小屋農園」を立ち上げた。建設業者の新分野進出というより、農業生産法人を営む事により何か現状打開の姿が見えてくるのではないかと考えた。これからの産業としてどうなのか、試行錯誤の連続であるが、地域資源を生かしたい、仕事が減り働くのが難しい社会情勢の中で若者に働く場を与えたい、環境と調和した資源循環型の産

業を立地したい、健康と生活を充実させる農産物を供給したい、そんなさまざまな思いを秘めて取り組んだ事業なのである。

現在の農地法の制約の中では農業生産法人以外の法人は農地を取得することが難しい。入手できた当該農地を当初は耕作することも認められなかった。戦前の小作人制度は、自由に農地を取得し農業を営むことすら出来ない苦しい時代でもあった。戦後に農地解放が行われ、ようやく小作人が自由を手にし懸命に走ってきたのが日本の農業である。今こそ見直しの時期なのである。

国土保全のために賛同していただいた地元柳瀬集落の方々、お付き合いのある各業者のオーナーの皆様、当社の従業員の有志など、五十名の出資者を募り設立運営に至ったのが「有限会社 高源農産」である。五十名の夢と希望とともに、荒廃農地約二十ヘクタールを耕作し始めた。また、「農業生産法人 今小屋農園」が設立承認されたのを期に、土地は水田六ヘクタール、畑二十六ヘクタール、山菜園等山林四十八ヘクタール、合計約

Value Sight 新分野進出



農業の基本となる土づくり「堆肥ヤード」

八十^ノの農地を耕作している。また、施設として集出荷施設（事務所兼倉庫）、用水ポンプ場、堆肥舍ストックヤード、木材破砕機、製材機を所有し、農産物の生産をはじめ、堆肥製造（間伐材利用）等の関連事業を行なっている。平成十年から現在までの主な生産物は、米、そば、アスパラガス、野菜、山菜、きのこなどである。建設業で培ってきた農地整備のノウハウと農政当局との密な協議、当方からの積極的な提案を行ったが、そのうちどれ一つが欠けても実現はできなかった。

農地の位置は大蔵村南山の標高三八〇^ノ程の高地にある。平地と比べ温度で二、三度の差がある。東北の秘境とも言われる歴史ある肘折温泉から約十分の位置にあり、西方には葉山連峰を、北方には出羽富士と称される

鳥海山を仰ぐ。昔は月山への登山口としても有名であった。春は若葉、夏は深緑、秋は炎の空間である。自然界のコントラストは絶妙であり、まさにリゾート高原である。

過去二十年来休耕され、荒廃状態の農地であったが、自然環境に恵まれた日本有数の観光温泉地の環境保全を考え、農地整備による有効活用を目指し、農作物生産、堆肥づくり、重機オペレーター養成、社員研修の場としても活用している。農園の従事者は主に地元の高齢者を雇用し、重機及び農機具等のオペレーターは株式会社柴田組関連会社からの出向、または派遣社員を充当している。関連会社の従業員教育、または新規採用者の教育の場としても最高の条件を備えている。農業者として経験豊富な地元雇用の方々と作業することで、人間形成に大切な精神鍛錬を実地指導により身につけられる最高の研修場であると考えている。一年の半分は雪の中という豪雪地だが、目下、利益よりも人材育成に重点をおいている。

国の政策である転作の奨励、共済の加入など、最近になって各関係機関より情報が入手できるようになったが、農業者にとって速やかに対応できる農政の公的助成、支援策を要望したい。大蔵村農林課・農業委員会、山形県農業振興課、山形JAもがみ、山形中央農業共済組合、山形県森林整備課等各団体より助言をいただいている。青果市場（新庄、酒田）、山形JAもがみ、産地直売、また、最近では羽黒農協、月山牧場等まで足を伸ばし生産販売体制の充実と確保をめざしている。無農薬で新鮮な高原野菜を目標に安定した農産物の生産、特産物の開発、良質な堆肥の生産技

術の確立等を追求していきたい。

米も野菜も価格は下がる一方で、離農する人が増え後継者も不足している。そして、海外からは安価な農産物が入り、安全でおいしい国産の農産物はどこかへ消え去っていく。私たちの命を支え、食文化の原点である日本の農業が消えてしまうのかと危機感さえ感じられる。私の経験から農業経営は「土地」または「すばらしい土づくり」から始まると考える。それを見失っては何の発想も生まれない。自分の身体を動かし、化学肥料や機械に頼らず、日本の農家が自然と勘にたより伝統的に実践される姿がすべてではないか。楽で便利になった半面、忘れ、見失ったものはないか。どんなに時代が変わろうと農業の基本は土づくりではないか。

現在、高齢化が進み、後継者不足が続く厳しい農業ではあるが、農業は夢と希望の持てる分野だと確信している。日本古来の風土、または食文化を含めた日本文化のために、もつともつと農業を見つめて行きたい。

■柴田 五郎（しばた・ごろう）

株式会社柴田組代表取締役会長。
昭和6年7月16日生まれ。鮭川村出身。
柴田重機運輸^(株)代表取締役会長。最上共同クリーン^(株)代表取締役。金山砕石^(株)代表取締役。
^(有)高源農産代表取締役。農業生産法人^(有)今小屋農園代表取締役兼務。
連絡先：〒996-0025 新庄市若葉町9番11号
株式会社柴田組内
TEL 0233-22-7433
FAX 0233-22-4770